『東京大学言語学論集』**36** (2015.9) 185-217

話し手・聞き手を指示する英語表現

―主体性と客体性から―

湯本　久美子

キーワード: 話し手指示英語表現　聞き手指示英語表現　主体性　客体性　意味拡張

要旨

話し手を指示する英語表現は "I"のみとは限らない。典型的には聞き手を指示する "you"や他者を指示する "they"、さらには固有名詞や親族語等の役割名も話し手を指示する場合がある。加えて、"this" や "it"も話し手指示に使われることもある。聞き手を指示する英語表現についても同様であり、"you" のみとは限らない。本論ではこれらの話し手そして聞き手指示表現を認知文法の枠組みにおいて分析することにより、話し手が捉えている話し手自身の姿を考察する。考察の焦点を「主体性」と「客体性」の対比に置く。分析の結果、"I"は客体的自己を前面に出しながらもその背面には主体的自己を持っていることを示す表現であること、一方、"I" 以外の話し手指示表現は、それが逆転し、主体的自己が前面に出されそして客体的自己が背面に表されている表現と考えられることを提案する。話し手は自身をどのように捉えているかで自身を指示する表現を使い分けていると考えられるのである。

1. はじめに

話し手そして聞き手を指示する英語表現は、後述する(2)～(7)で示すように、"I"そして "you" にとどまらない。本論の目的は、話し手そして聞き手を指示する様々な英語表現の分析を通して、話し手が自身をどのように解釈し、その解釈をどのように聞き手に示しているかについて考察することである[1]。認知文法の枠組み(Langacker 2007 他)において分析を行い、その焦点を Langacker (1985)他が主張している "subjectivity"（主体性）と "objectivity"（客体性）[2]の対比に置く。

話し手そして聞き手を指示するもっとも一般的な方法は人称代名詞を用いることであり、Levinson(1990:71)はその定義を(1)のように示している。

(1) 人称の定義　Levinson(1983:62)

- 第一人称(first person)：話し手の彼自身への言及の文法化。
- 第二人称 (second person)：話し手の一人ないしはそれ以上の受け手への言及の記号化。
- 第三人称(third person)：問題となる発話の、話し手でも受け手でもない人および存在

---

[1] 西村義樹先生より多くの参考文献のご教示そして貴重なご指導をいただき、心より感謝申し上げます。

[2] Langacker の用語 "subjectivity"と "objectivity"の日本語訳として、本論では各々「主体性」と「客体性」を用いることとする。

物への言及の記号化。

この定義は、日常の英語使用に一定の明解な説明を与えている。しかしながら、この定義から外れている言語事象も少なくない。例えば、下記の(2)は話し手が自身の人生について語っており、下線 “you”は話し手自身を指示している。 (3)は看護師ホプキンズの発話であり、下線 “we”は聞き手である患者ジェラルドを指示している。

(2) It wasn't a bad life. You got up at seven, had breakfast, went for a walk….

真野(2010:179)下線は筆者による

(3) Mary protested, tears springing to her eyes:
"It isn't true, Dad. You've no right to say that!"
Nurse Hopkins intervened with a heavy, determinedly humorous air.
"Just a bit under the weather, aren't we, this morning? You don't really mean what you say, Gerrard. Mary's a good girl and a good daughter to you."

Agatha Christie. *Sad Cypress*. p.22.下線は筆者による

さらに、 (4c)は聞き手を “it”で指示している。 (5)の場合には、話し手 A は聞き手を指示するのに “this”を、そしてそれを受けた話し手 B も自身を指示するのに同じく“this”を使っている。

(4) ホテルの部屋にいるときにドアがトントンとたたかれた。それに対して室内の客が相手を問う場面での発話：a #Who are you?　b #Who is this?　c Who is it?
(5) 電話での A と B の対話：A: Who is this?　B: This is John Smith.

そして “you”は眼前にいる聞き手以外にも多様な人を指すことができる。(6a)がある論文内の文であるとすると、下線の “you”は一人または複数の読者という解釈でもよい。アメリカ政府高官の発話としての(6b)の“you”は全ての欧州人を指している。テロリストの発話という想定の(6c)の場合は、“you”は世界中の誰をも指していることになる。

(6) a. You should now be looking at example (21a).　Langacker (2011:194)　下線は筆者による
b. Why don't you Europeans acknowledge our right to rule the world?　ibid.
c. You'll never catch me and you'll never be safe.　ibid.

さらに、 “you”そして “I”は別な興味深い特徴も持っている。一般的に、「代」名詞は名詞の置き換えと扱われることが多い。しかし、“I”と “you”は「代」名詞 (“pro” noun)と呼ばれているにも関わらず、話し手と受け手を指示する “central forms”であり、前出の固有名詞を “I”そし

て “you”で置き換えることは普通ではない。逆に、“fuller noun phrases”が使われる場合は、それらが “I”そして “you”の代用ということになる (Schegloff 1996:442)。 (7)はその一例であるが、三人称相当となる固有名詞 “Hercule Poirot”は “I”の単なる代用以上の発話効果を見せている。

(7) (探偵 Poirot から Joseph 卿へ) Hercule Poirot said: “There is no question of failure. Hercule Poirot does not fail.” Agatha Christie. *The Nemean Lion*.p.20 下線は筆者による

このような様々な興味深い現象を踏まえて示されているのが下記の意見であると考えられる。

> *I* designates the speaker, *you* the hearer, *they* a group which excludes the interlocutors. Such descriptions may not be wrong, but they are certainly superficial. Langacker (2007:171)

> ヨーロッパ諸語に見られる人称の区別とは、私の考えによれば、話者が自分を取り巻く世界をどのようなものと見るか、ある特定の対象に対してどのような心的態度をとるかを言語的に表現する、非常に主観的で心理的な現象なのである。 鈴木(1996:158-159)

とすると、(1)で示した人称代名詞の定義はいわばプロトタイプな現象のみに当てはまる表面的なものであり、上述した多様な用法の底には鈴木(1996:158-159)が指摘している何等かの主観的で心理的な作用が働いていることになる。

それでは、この何等かの主観的で心理的な作用とは何か。この問いを考えるのが本論の目的である。話し手そして聞き手を指示する多様な英語指示表現を分析し、そこから話し手が捉えている話し手自身の姿を認知文法の枠組みで考察を行う。その考察によりこの問いを考えていきたい。指示表現として、人称代名詞(I, s/he, we, you, they, it)・指示詞(this, that)・固有名詞(ex. Hercule Poirot)・役割名(ex. Mother, President) を取り上げる。

そして、分析の焦点を Langacker (1985)他が主張している “subjectivity” （主体性）と “objectivity”（客体性）の対比に置く。認知文法において重要な概念である「主体性」と「客体性」については 2.1 節で詳述するが、この違いは下記の鈴木(1996:111)で述べられている「内的自己」と「外的自己」の区別におおよそ相当するものと考える。

> 私たちの意識の主体をかりに第一の「私」とすると、その意識によって観察される「私」は、客体としての第二の「私」なのである。この意識の主体としての自分を「内的自己」と呼ぶことにすれば、客体としての自分は「外的自己」ということになる。普通他人が自分を見るときは、この外的自己の部分を見ているのである。つまりこの他人に見えている自己が社会的自己なのであって、意識の主体としての自己は、いわば個人的自己として他人には観察できない自分なのである。 鈴木(1996:111)

例えば、(8)では認知主体（＝話し手）である「私」が “me”と言語化されており、言語化されていることから話し手は記述・観察の対象であり「外的自己」が表されている。これは認知文法の枠組みでは「客体度」が高くなっていると呼ぶ現象である。一方、(9)では認知主体（＝話し手）は言語化されておらず、意識の主体としての「内的自己」の状態であり、これを認知文

法では「主体度」が高い表現と呼んでいる。

(8)　Vanessa was sitting across the table from me.　　Langacker (1990:20)下線は筆者による

(9)　Vanessa was sitting across the table.　　Langacker (1990:20)

認知文法においては意味とは概念であり、概念化を行う認知主体は認知文法の根幹にあるものである。認知主体の多くは話し手と重なる。従って、話し手の姿を明らかにするのは認知文法においては重要な研究事項であることから、Langacker は Langacker (1985)を始めとして多くの論文を「客体的表現」(8)と「主体的表現」(9)との対比に焦点を当て執筆している。

本論もその枠組みに沿うものではあるが、「客体的表現」と「主体的表現」の対比自体に焦点を当てるのではなく、話し手・聞き手が何らかの表現で言語化されている状況、つまり客体的表現のみを分析対象とし、その客体的表現内における「客体性」と「主体性」の度合いの違いを議論する。　客体的表現の中で、(8)のような一人称代名詞によって話し手が言語化されている形式、そして二人称によって聞き手が言語化されている形式を無標と捉え、(2～7)のような話し手を指示するのに "I"を用いない、聞き手を指示するのに "you"を使わない形式を有標とする。それらの有標表現を細かくみていくことにより、それを発話する話し手の指示対象―話し手自身と聞き手―の捉え方(construal)を客体性そして主体性の観点から考察する。そしてそこから見えてくる話し手の姿を考えていきたい。

結論として、次の提案を行う。話し手は自身をどのように捉えているかで自身を指示する表現を使い分けている。"I"は客体的自己を前面に出しながらもその背面には主体的自己を持っていることを示す表現である。一方、 "I"以外の話し手指示表現はそれが逆転し、主体的自己が前面に出されそして客体的自己が背面に表されている表現と考えられ、そこには焦点のシフトが見られる。

本論の構成は次のとおりである。 2 節では Langacker による「主体性」・「客体性」の考え方の概要を説明し、その後本論の研究目的を述べる。3 節では話し手が自身を "I"と呼ばず、そして相手のことも "you"と呼ばない事例を見ていく。人称代名詞・指示詞・固有名詞・役割名を取り上げ、それらの機能、意味拡張、そして主体性/客体性の対比を検討する。3.1 節では、"this/that"や"it"を用いる状況というのは、どのような認識を表しているのかを考える。3.2 節では単数三人称表現である"he"/ "she"、固有名詞、役割名を見ていく。3.3 節では複数人称表現 "we", "you", "they"を扱う。3.4 節では 3.1 節～3.3 節の分析結果を踏まえ、主体性と客体性の二面性を持つ話し手について "I"とそれ以外の指示表現の違いを議論する。最後の 4 節は結論を述べる。

2. 「主体性」と「客体性」

本節では本論の枠組みとなる Langacker による「主体性」・「客体性」の概要を説明し(2.1 節)、その後、本論の研究目的を述べる(2.2 節)。

2.1 Langacker (1985/1990/1996/2002/2006) による「主体性」と「客体性」

Langacker は、Langacker (1985)を始めとして一貫して視覚状況における観察者(observer)とその視覚対象物(the entity that is observed)という非対称性に基づく、"subjective"（主体的）と"objective"（客体的）解釈の重要性を主張している。例えば、Langacker (2006:18)では以下のように述べている。

> An entity is said to be **objectively construed** to the extent that it goes "onstage" as an explicit, focused object of conception. An entity is **subjectively construed** to the extent that it remains "offstage" as an implicit unselfconscious subject of conception. At issue, then, is the inherent asymmetry between the conceptualizer and what is conceptualized, between the tacit conceptualizing presence and the target of conceptualization. The asymmetry is maximal when the subject of conception lacks all self-awareness, being totally absorbed in apprehending the onstage situation, and the object of conception is salient, well-delimited, and apprehended with great acuity. These are of course matters of degree. But whether they are sharply distinct or somewhat blurred, the subject and object roles figure in every conceptualization. In principle, an expression's meaning always incorporates the conceptualizing presence who apprehends and construes the situation described. Langacker (2006:18)

まず、Langacker (1996:334-336)は Fauconnier が "mental space"と呼ぶものを "the current discourse space"(CDS)と呼んでいる。このスペースは話し手と聞き手が共有している要素と関係で構成されており、 話し手の知識を意味する"K_S"と聞き手の知識を意味する "K_H"のスペースが交差している部分を指している。この話し手の知識 "K_S"の中には"maximal scope" (MS)と呼ばれる部分があり、これは CDS そして K_H の一部とも重なっている部分である。MS は言語表現が喚起するまたは前提とする意味のベースとして機能するものである。さらに MS の中には "immediate scope"(IS)という特別の部分があり、この部分が言語表現の直接的意味として機能する。

この IS はメタファー的に "onstage region"と呼ばれてもおり、観劇に例えると舞台に相当し、注意が向けられる場所である。一方、MS は劇場全体である。そして観客席に相当する部分が "offstage region"ということになる。この観客席(offstage)から舞台(onstage)を見る視点構図が "subjective"（「主体的」）そして "objective"（「客体的」）の非対照性の概念的原型である(Langacker 2002:15)。

舞台を見ている観客が舞台観察に熱中して自己意識を持たないことがあるように、視覚対象物である"onstage"にある客体（conceptualized）を知覚している視覚者/概念化者(viewer/conceptualizer)は自身の存在を概念の客体として捉えていない。このような場合の viewer/conceptualizer は概念主体としての働きしかないことから「主体的」な存在であり、viewer/conceptualizer は主体的に解釈される。一方、舞台の上の実体は概念化の客体物として「客体的」な存在であり、客体的に解釈される。下記の図 1 の(a)がこの構図を表している。 "P"は "perceived object", "PF"は "perceptual relation"、 "OS"は "on stage"の略である。図 1(a)における "V"(viewer/conceptualizer)は舞台上の客体を見ている主体的存在である。

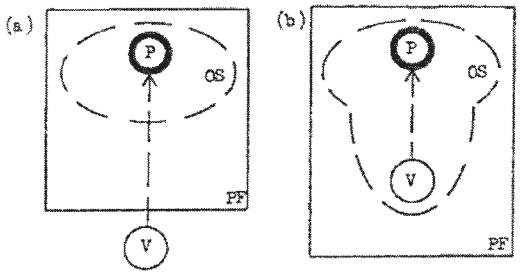

図 1 Langacker (1990:7 Figure 1 (a) (b))

一方、図 1 (b)は "egocentric viewing arrangement" (Langacker 1990:8)の構図を示すものであり、そこでは viewer/conceptualizer も舞台の上に登場していることから観客自身も視覚に入っており、客体の対象となっている。この図 1(b)が示す "egocentric viewing arrangement"（自己中心的配置）を言語的に示した例文が(8)である。ここでは参照点である話し手が言語化され舞台の上に登場しており、話し手はもはや単純に観察者なのではなく、ある程度観察の対象物となっている(Langacker 1985:122)。

(8)　Vanessa was sitting across the table from me.　　Langacker (1990:20)下線は筆者による

(9)　Vanessa was sitting across the table.　　Langacker (1990:20)

一方、(9)のディフォルト解釈ではその参照点は同じく話し手であるが、参照点が言語化されておらず話し手の客体度は(8)と異なると Langacker(1990:20)は主張している。(8)については "(4)a (=本論の 8 を指す) suggests a detached outlook in which the speaker treats his own participation as being on a par with anybody else's" そして (9)について " (4)b (=本論の 9 を指す) comes closer to describing the scene as the speaker actually sees it"と違いを述べている。

言い換えると、 "me"という人称代名詞が言語化されている(8)は認知主体の「客体度」が高く、言語化されていない(9)は「主体度」が高いということになる。このコントラストは認知主体が事柄をどのように捉えているかの違いであり、さらに、事柄における自身の位置づけをどのように捉えているかの違いを示していることになる。

そして、Langacker (1985:144)では話し手には少なくとも 5 種類の異なった主体性程度が可能であると述べている。i から iii の順で客体性が増加し、そして vi と v が "displacement"に関するものである。

In all, then, there are at least five different degrees of subjectivity possible for the speaker, three without displacement and two with. Without displacement, the speaker can be

i　external to the scope of predication

ii　offstage within the scope of predication

iii on stage within the objective scene, which is portrayed as viewed "through his eyes"

The subjectivity of the speaker decreases from (i) through (iii), and his objectivity increases, though in (iii) there is little basis for the subjective/objective contrast. With displacement, however, the basis for the contrast is restored, and the speaker gains in objectivity in proportion to the degree of displacement. Here there are at least two options:

iv the assumed vantage point can be confined to the objective scene; or

v an offstage vantage point can be assumed, resulting in a greater measure of objectivity.

Langacker (1985:144)

i から iii の具体例として、仮に訪問者が UCSD 言語学科を訪れ、会議室に座っている著名な人を見て"What a thrill to be in such illustrious company!"と叫んだとする。その後に続く発話として次の 3 種が示されている。

(10) i 叙述作用域の外：Ed Klima is sitting across the table from Dave Perlmutter!

Langacker (1985:140)

(11) ii 叙述作用域の中であるが、 "offstage": Ed Klima is sitting across the table.

Langacker (1985:140)

(12) iii 話し手の目を通して観察され、客体的シーンの中にいる "on stage": Ed Klima is sitting across the table from me! Langacker (1985:140)

(10)i は参照点が第三者であり話し手は完全に観察者である、(11)ii は参照点が話し手であるが言語化されておらず、話し手は "offstage"にいる状態である、そして(12)iii は参照点である話し手が言語化されており、自身も客体的対象物となっている。従って、(10)i から(12)iii の順で話し手の客体性が高くなっている。

次に、 vi と v の"displacement"（超越性・自己分化）についてであるが、この"displacement"現象は、私たちが持つ概念的超越性(conceptual displacement)能力に基づくものであると説明されている(p.127)。まず、vi は(13)と(14)のコントラスト、そして(15)と(16)のコントラストで具体的に説明されている。

(13) Don't lie to <u>me</u>! Langacker (1985:127)下線は筆者による

(14) Don't lie to <u>your mother</u>! Langacker (1985:127)下線は筆者による

(15) Come over here and sit beside <u>me</u>. Langacker (1985:128)下線は筆者による

(16) Come over here and sit beside <u>your mother</u>. Langacker (1985:128)下線は筆者による

(14)の "your mother"は怒った親が子供をさとす場面に使われそうな発話で vi の具体例である。(14)では母親は客体的シーン(=on stage)の中に限定されている"external vantage point"をとり、あたかも他の個人であるかのように自身を客体的に記述している。おそらくこの "external vantage point"とは子供の視点である。この視点の異なりからもたらされる自己分化現象が

“displacement”（超越性）と呼ばれている。さとす場面のみならず、母親が子供の視点をとることにより感情的愛着を表現している場合もある。(16)の “your mother”は愛情そして連帯を表すものである。

このように、私たちは今ここの “vantage point”から離れた状況を記述することができ、 話し手が自身を三人称である “the person uttering this sentence”と指示しているのは、自身をあたかも他の個人であるかのように特徴づけているものである(p.127)。そして “I”とは異なり、発話の状況においてのみ聞き手は “the person uttering this sentence”が話し手を意味していると理解することができる。

最後の v は “vantage point”が“offstage”にあり、さらに客体性が高まる “cross-world identification”（交差世界同定）(Langacker 1985:129)と呼ばれる現象である。その具体例は誰かに自分の写真を見せながらの会話や映画の中での自分の役柄を話す発話(17)で示されている。

(17) That’s <u>me</u> in the middle of the top row.　　Langacker (1985:129)下線は筆者による

“Vantage point”である実際の話し手の姿は言語化されておらず、 “offstage”にとどまっている。話し手が他者の視点に依っていないことから先ほどの vi の例とは異なる現象である。話し手は他の「世界」－写真や映画－を考えており、その世界の中での話し手(G’)が実世界の話し手(G)と同一ということになる。

2.2 本論の研究目的

本論で取り上げる言語事象は 2.1 節で紹介した Langacker (1985:144)の “iii　on stage within the objective scene, which is portrayed as viewed “through his eyes”と “iv　the assumed vantage point can be confined to the objective scene”に相当する事象である。そして “iii”を無標そして “iv”を有標と捉えて、分析を行う。

Langacker (1985)他の分析は “ii”の話し手の姿が言語化されていない「主体的」状況と “iii”の言語化されている「客体的」状況との対比に焦点が置かれているように思われる。もちろんその理論的意義は大きい。

しかし、日常のコミュニケーションにおいて、おそらく対話者は自分たちに関する事柄を話題として選ぶことが多いと思われる。そして主語を必要とし、「する的」表現を好むと言われている英語の場合、話し手・聞き手が焦点化される状況は少なくないと思われる。とするならば、話し手そして聞き手が言語化される可能性は高く、“I/my/ me”そして “you/your/you”の使用が頻繁であることが予測される(Taylor 2012:157)。そこから、話し手の目を通して観察され、話し手自身も客体的シーンの中にいる “on stage” の状況 “iii” “ Ed Klima is sitting across the table from <u>me</u>! “(Langacker 1985:140)はめずらしい状況ではない。そしてその際に一人称代名詞が用いられるのは無標と思われる。それに対して “iv”は有標であり、かつ、1 節の(2～7)で示したように

多様である。しかしこれらの有標表現は認知言語学において十分に研究されているとは言えず、Langacker(1985)も "iv"の例として上述の "your mother"の一例を挙げているのみである。従って、多様な有標話し手指示・聞き手指示表現を研究対象とし、それらの「主体性」と「客体性」を考察すること、そこから「話し手」の姿について問うことは意義のあることと考える。

3. 指示表現分析

本節では、話し手と聞き手の有標指示表現を分析する。3.1 節では話し手と聞き手が直接顔を合わせていない状況から考察を始め、"this, that, it"の用法を見る、3.2 節では単数三人称表現として"he, she"の単数人称代名詞、固有名詞と役割名を取り上げる。3.3 節では複数人称代名詞 "we, you, they"を扱う。各々の節でまず観察される言語事象を示し、その後で考察を行う。そして最後の 3.4 節では 3.1～3.3 節での分析結果を基に「話し手」について考える。

3.1 This・that・it

話し手が自身を "I"以外で指示する場合の一つとして Levinson (1983:71-72)は話し手と聞き手が直接顔を合わせていない状況を挙げている。

> A further point to note in connection with person deixis, is that where face-to-face contact is lost, languages often enforce a distinct code of, for instance, self-introduction. Thus, whereas in a face-to-face meeting I can say *I'm Joe Bloggs*, on the telephone I must say *This is Joe Bloggs* or *Joe Bloggs is speaking* with third person verb agreement (but see Schegloff, 1979a); in contract in Tamil we would have to say on the telephone the equivalent of *Joe Bloggs am speaking*, with first person verb agreement. Levinson (1983:71-72)

面と向かっては "I'm Joe Bloggs."と一人称代名詞で話し手は自身を指示するが、顔を合わせていない電話においては、 "This is Joe Bloggs."等のように、指示詞が使われると述べている。

この "this"について、Fillmore (1977:120)は、下記のようにさらに細かくその使用環境を提示している。"This"は電話等による声のみの会話においての自称詞として使われるが、聞き手が自分の名前を認識してくれるだろうと話し手が予測できる場合に用いられるとのことである。

> The one with "this" is particularly interesting. The conditions under which it is appropriate for me to introduce myself with the locution "This is Chuck Fillmore" seem to be these: (i) the communication is by voice (i.e., not by a letter, say); (ii) the communication situation is not face-to-face; and (iii) I have reason to believe that you will recognize the name. This way of introducing oneself is appropriate over the phone, over the radio, or on television. Fillmore (1977:120)

この電話で使われる"this" (5A/B)は大変興味深い。

(5) A: Who is <u>this</u>? B: <u>This</u> is John Smith.

ダイクシス表現である"this/that"が通常の現場指示・文脈指示に用いられた場合、空間・時間・

心理的等の遠近のコントラストが対話者によって示される場合が多いと思われる。例えば、場面指示では話し手が "What is that?"と問い、聞き手が "This is my new PC."と答え、遠近のコントラストが示される。また文脈指示では 話し手 A の "I heard you will move to Osaka."に対して話し手 B は"Who told you that?"のように相手の発話を "that"で指示する。しかし(5)ではそのコントラストが失われており、話し手 B も自身を "this"で指示している。Fillmore (1977:121)は(5)の話し手 B の "this"の使用について "a way of taking the addressee's point of view"と説明している。

しかし、そもそもなぜ(5)の話し手 A は "Who are you?"と "you"を使わないのだろうか、話し手と聞き手が直接顔を合わせていない状況で通常の聞き手を指示する人称代名詞が使われないことがなぜ多いのだろうか。この難問に十全な答えを提供することは残念ながらできないが、話し手が"this"または "that" [3]を用いることによって示したい認知的状況を認知文法の枠組みにおいて考えることはできるかもしれない。

まず、認知文法の枠組みから説明する。Uehara (2006:78)は主体性の程度を通言語として比較する際の主体性レベルを計る基準を「グラウンド」表現、つまり、述べられている事態を今ここの現実にグラウンド＝結び付ける表現に置いている。①グラウンドが暗黙表現(implicit reference to the ground: ex. He came.)、②グラウンドが明示(explicit reference to the ground: ex. He came to me.)、③グラウンドが明示されていない(non-reference to the ground: ex. He went to Bill.)の３つのスケールを示している。①が最も主体性が高く、③が最も主体性が低いとしている。

このグラウンド表現について、Langacker (2002:8)は次のように述べている。ダイクシス表現はそれ自身の作用域に "the ground"を含むものと特徴づけられるが、全てのダイクシス表現が "grounding elements"であるわけではない。そして真の "grounding elements"として下記の非常に少数の高度に文法化された要素を提案している。この中に "this/that"が含まれている。

表 1 Nominal and clausal grounding in English　Langacker (2002:30) Table 1

	Definite	Quantificational
Nominal	*th* + prox/dist *(-is, -at,...)*	*ϕ, sm, a, some, most, ...*
Finite clause	*ϕ* + prox/dis (*ϕ*, *-ed, ...*)	*may, will, ...*+ prox/dist

この提案によると、英語における名詞類の "grounding predications"として同定された要素は指示詞(this, that, these, those)、冠詞(the, a, ストレスのない some, ϕ)そして特定の数量詞(some, most, all, no each, every, any)である。

---

[3] Fillmore (1977:121)は次のようにこの用法について説明している。
Remember that the "this" of the participant-identifying locutions was one of those words that switched roles between assertions and questions. "This is Harry Schwartz" means "I am Harry Schwartz," but – in American English, but apparently not in British English – "Is this Harry Schwartz?" means "Are you Harry Schwartz?" In Britain one would say "Is that Harry Schwartz?" and would regard the question "Is this Harry Schwartz?" as a part of a guessing game.

“Grounding predications”は叙述されている事態を現時点での現実、今ここの状況に結び付けるものである。そして、Langacker (2002:17)は"An important characteristic of grounding elements is that, although they necessarily invoke the ground in some fashion, they construe the ground with the highest degree of subjectivity consistent with its inclusion in their scope." (下線は筆者による) と、最高度の主体性を示している状況であると述べている。

とするならば、(5)に見るような“this/that”は当該叙述要素を今ここの状況に結び付けようとしている真っ最中ということを示しているという解釈が成り立つのではないだろうか。

「顔を合わせないこと」は「見えないこと」に繋がり、「見えないこと」は「わからないこと」、そして「わからないこと」は「認識できていないこと」へとメタファーとして繋がっていく。見えない存在、わからない存在を自身の対話の相手として容易に認識することは難しく躊躇せざるを得ない。この状況を舞台環境で言い換えると、“this”を相手指示そして自己指示に用いている(5)の話し手はまだ舞台に登場しておらず、舞台の袖から相手を「誰だろう」と観察している「グラウディング行為を行いつつある」存在ということになる。従って、話し手は完全な客体的存在では未だなく、観察者である存在としての姿を色濃く見せていると考えられる。

この “this”について Fillmore (1977:121)はこれを「使えない環境」を指摘している。

> …… The requirement that the conversation be face-to-face is not the requirement that the individuals see each other, because people meeting each other in total darkness would not use the expression with “this”, nor would blind people. I would not call up some complete stranger, somebody who had no reason to know my name, and begin our conversation with “This is Chuck Fillmore.” I have noticed that some telephone salespeople make use of the presupposition unfairly. …… The introduction with “this,” however, added to the near appropriateness of the “Hello, Charles” had the effect of making me think that this was somebody that I was supposed to know. Fillmore (1977:121)

真っ暗な中で自分のことを “this”と指すこともないし、盲目の人が使うこともない。つまり、電話のような「声」もなければ、「顔」も見えないという状況では “this”は使わない。それに加えて、自分のことを知っているという前提を持っていない人には “this”は使わない、と述べているのである。この状況は、ホテルの部屋にいるときに、誰かが閉まっているドアをトントンとたたく時と類似している。このような時、英語では相手を指す言葉として慣用されているのは (4b)“this”でもなければ、(4a)”you”でもなく、(4c)の “it”である。

(4) ホテルの部屋にいるときにドアがトントンとたたかれた。それに対して室内の客が相手を問う場面での発話：a #Who are you? b #Who is this? c Who is it?

なぜ、直示 “this”ではなく代名詞 “it”なのだろうか。ドアのトントンという音を人間と結びつけるのは社会的状況でしかない。トントンという音のみではその音が何らかのシグナルであり、そのシグナルの発信者が人間であることには直結しない。人間によるシグナル音とは直結しないことから話し手はその指示対象との間に「グラウンディング行為」を行うことを表す

"this/that"を用いることもできないということになるのだろう。 "Grounding elements"に入らない、また直示でもない"it"で相手を指し示すということは、話し手は「グラウンディング行為以前」の状態であることを示すものではないだろうか。姿どころか声すらわからない相手を自身の対話相手と認識する困難さはさらに高くなる。従って、再び舞台のメタファーで言い換えると、話し手は観客席から腰を浮かし舞台に移動しようかと考えている状況に近いのかもしれない。つまり話し手の主体度は "this"よりいっそう高いものと考えられる。

このような状況に"it"が用いられるという現象は非英語母語話者の筆者には興味深く感じられる。なぜならば、いかに音の発信者が人間とは直結しないとは言え、Thomas (1995:112-114)が「社会的にも生物を区別しない代名詞を人間に対して用いることは原則許されない」と述べているように、 "it"はもっぱら無生物の指示に用いられるからである。Thomas はその、例外として性別のわからない赤ちゃん[4]や死体等を挙げているが、その性別がわからない動物や赤ちゃんを指示する場合でも相手への礼儀を考え"it"の使用を避ける(Thomas 1995:114))と述べている[5/6]。

> Nor, as a rule, is it socially permissible to use other than gender-specific pronouns in relation to human beings An exception to this norm is found in the case of unborn or very young children, in relation to whom some people find it appropriate to use the pronoun *it*, regardless of whether the infant's sex is known to them.
>
> Thomas (1995:112)

鈴木(1996:155)はもしこのような場合に "Who are you?"と問えば、部屋の中の人が、外来者の素性、資格、正体などについて疑いの気持ちを抱き、詳しい情報をもとめる、やや詰問調の言い方になってしまうと説明している。そして、鈴木(1996:159-160)は、「一般に相手の素性や名前が分からないとき、あるいはそれに自信がないとき、ヨーロッパ語では三人称を使うことが多い。」と述べ、そこから逆に自信があってもあたかもないかのように見せる使い方が生まれているとしている。そこに含まれる「一種の間接性が、相手に対する遠慮、敬意、尊敬の念といった心理の表明につながってゆく」（鈴木 1996:160）として、この用法を「尊敬の三人称」と呼んでいる。下記の例文はその例であり、「イシャウッド様とお見かけしますが？」という気持ちが表されていると説明している。

(18) The porter was standing at the door as I am panting up. Evidently he'd been on the look-out for me.
"It's Mr. Isherwood, isnt't it?..." Christopher Isherwood: *Prater Violet* 鈴木(1996:160)

---

4 『朝日新聞』2006年9月6日夕刊　秋篠宮悠仁様ご誕生について「米CNNテレビは5日……速報。東京特派員の女性キャスターが『イッツ・ア・ボーイ（男の子です）』と伝えた。

5例えば、下記の文では Mrs. Samuelson は自身のペット犬の Nanki Poo に対してさえ"him"を使っている。
(Mrs. Samuelson to Poirot) "……My poor darling Nanki Poo. Anything might have happened to <u>him</u>!." Agatha Christie. *The Nemean Lion.* p.19 下線は筆者による。

6 さらに Thomas(1995:118)はある人が遊び相手の女性を繰り返し "it" で指示することによりその女性を「もの」の地位に貶めたという報道実例さえも示している。

この「尊敬の三人称」例は下記の会話の "It is Iris Marle, isn't it." 「アイリスさんではありませんか」にも見ることができるだろう。

(19) She had gone to luncheons and teas and dances without, however, enjoying them very much. She had felt listless and unsatisfied. It was at a somewhat dull dance towards the end of June that she heard a voice say behind her:
"It is Iris Marle, isn't it?"
She had turned, flushing, to look into Anthony's – Tony's – dark quizzical face.
He said: "I don't expect you remember me, but – "
She interrupted. "Oh, but I do remember you. Of course I do!"
Agatha Christie. *Sparkling Cyanide*. pp.14-15 下線は筆者による

小泉(1990:67)は、B.F.Head が「人称の相互関係における物理的距離が、伝達関係者の間の社会的距離と親密度に関連しているように思える」と述べているとし、３人称の方が２人称より距離が遠くなり、個人の認定では、単数よりも複数の方が隔たりが大となる、と説明している。そして、これにより西欧諸語における人称代名詞にみられる敬称の用法が理解できる、順に距離が大となり密度（数）が薄くなる。つまり尊敬の比率は大となると述べている。従って、聞き手を三人称である "it"等で指示することを敬意表現と解釈することは十分妥当ということになる。

いきなり誰かを自分の対話相手と見なすことは、その人にとり失礼な行為というのは十分理解できる。そこから "you"でも、 "this"でもない"it"—「尊敬の三人称 it」— を用いることになるのだろう。

しかし、不思議なことに、この "it"は電話においては全く別な性質を見せている。Fillmore (1977:120)は自己紹介で自分を指すことばとして、"it、this、I'm、my name"の４つを挙げているが、この順番は聞き手が話し手を同定できる容易さの順番だと述べている。例えば、 "it"[7]は聞き手が自分の声を容易に認識できることを知っている場合、つまり「知っている期待値の高い声」の場合に使われ、 "my name"は相手が自分の声を聞いたことがないと思う場合に使われる。

(20) It's me. Fillmore (1977:120)下線は筆者による
(21) This is Chuck Fillmore. Fillmore (1977:120)下線は筆者による
(22) I'm Chuck Fillmore. Fillmore (1977:120)下線は筆者による
(23) My name is Chuck Fillmore. Fillmore (1977:120)下線は筆者による

聞き手が自分の声を容易に認識できることを期待している場合に "it"を使う状況に下記の

[7] 2015 年 5 月のオバマ米国大統領の初ツイッターは "Hello, Twitter! It's Barack."で始まっている。

(24)と (25)が当てはまるだろう。 前後の話から “it”の指示対象である自分を聞き手がすぐにわかってくれると話し手が期待していることが伝わってくる。

(24) Mrs. Harter got the impression, why she did not know, that the machine was tuned into somewhere very far away, and then, clearly and distinctly, a voice spoke, a man's voice with a faint Irish accent.
"Mary – can you hear me, Mary? It is Patrick speaking... I am coming for you soon. You will be ready, won't you, Mary?"
Then , almost immediately the strains of Annie Laurie one more filled the room.
Agatha Christie. *Where There's a Will.*p.186 下線は筆者による

(25) "Hallo!" he growled into the receiver.
A woman's voice answered him, a soft, caressing voice with a trace of foreign accent.
"Is that you, beloved?" it said.
"Well – er – I don't know," said Mr. Eastwood cautiously.
"Who' speaking?"
"It is I. Carmen. Listen, beloved. I am pursued – in danger – you must come at once. It is life or death now."
Agatha Christie. *The Mystery of the Spanish Shawl.* p.200 下線は筆者による

この「知っている期待値の高い声の it」については、Gundel, et al. (1993:184)による情報処理の観点からの説明が当てはまるかもしれない。Gundel, et al.は “it”を“in focus”と分類している。 “It”の指示物は短期記憶にあるのみならず、現在の attention の中心にあることを示す、焦点化されているものは一般に少なくとも先行する発話の話題を少なくとも含み、それと同時に後続する発話の話題であり続けるものを含むと説明している(pp.279-280)と説明している。“It”のこの情報的特徴は「知っている期待値の高い声の it」と符合する。

しかしこの「知っている期待値の高い声の it」と心理的遠さを表す「尊敬の三人称 it」とはどのようにつながるのだろうか。残念ながらこの二つの繋がりを説明できる十分な答えを本論は提示することはできず、今後の課題である。しかしながら、どちらの“it”の使用状況においても明白な対話者としての相互認識が未だ 100%成立しているのではないという重要な共通点が見出される。

本節で取り上げた“I”や “you”が使われず、“this”や “it”が使われる例―電話の例、暗闇の例、ホテルのドアの例、道で他者を呼び止める例―に共通しているのは、話し手と聞き手が双方において互いを明白な対話者と未だ認識していないという点である。従って、話し手が自身を “I”と呼ばず、そして相手のことも “you”と呼ばず、 “this/that/it”を用いる状況というのは、双方を未だ対話者とは認識していないことを示していることになる。そこから逆に “I”そして “you”[8]

[8] Schegloff (1996:448)は、三人称が指示可能なターゲットをカモフラージュするために使われる用法を挙げて

の使用は、互いを対話者と認識していることを表すサインではないかと考えられる。

3.2 He・she・固有名詞・役割名

三人称代名詞について Langacker (2007:176-177)は、定冠詞・指示詞との類似性を指摘している。なぜならば、三人称代名詞は、定であり、指示詞の距離に関するパラメーターとも関連を持っており、一般的に "the speaker vs. everybody else, or alternatively, with the speaker and hearer vs. everybody else."という二方向のコントラスと関連しているからである。このコントラストが示す様に、三人称は話し手以外または話し手と聞き手以外である「他者」を指示するのが一般的であることから、話し手が自身を "he"または "she"の単数三人称の代名詞で指示する例は非常に少ないようである[9]。

その少ない例の一つが再びであるが電話の会話である。(26)話し手Bの "she"は話し手Aの発話 "Mrs. Smith"を照応しての "she"であると言えるだろうが日本語には見られない使い方である。(27)では "himself"が "Anthony"を受けて使われている。このような用法は英語人称代名詞の持つ文法性質の高さを示すものと考えられるだろう(ref. 注 14)。

(26) A: May I speak to Mrs. Smith? スミスさんとお話ししたいのですが。
B: This is she. はい、私です。

(27) The telephone rang and she went to answer it.
"Hallo-who?" Her face hanged, its white hopelessness dissolved into pleasure. "Anthony!"
"Anthony himself. I rang you up yesterday but couldn't get you……"
Agatha Christie. *Sparkling Cyanide*. p.79 下線は筆者による

代名詞ではなく、単数三人称相当の名詞の使用については、大きく分けて固有名詞と親族名・

いる。大学のコーヒーショップに並んでいる人に対して店員は目線を曖昧にして "who's next" と三人称でいうことにより、特定の個人をターゲットとすることを避けていると説明している。
(1) Server: Can I help who's next? Schegloff (1996:449)

[9]会話ではないが、ことわざには "he"は使われている。(4/5)のように関係節を伴うものもある。
(1) He fells two dogs with one stone. 奥津(2000:161)
(2) He has long arms and a long tongues as well. 奥津(2000:216)
(3) He knows how many beans make five. 奥津(2000:209)
(4) He that chooses takes the worst. 奥津(2000:130)
(5) She that is born a beauty is half married. 奥津(2000:108)
奥津(2000:iii)はことわざについて「いずれの国においても、民族の知恵、習俗規範、価値観など、一言でいえば民族の文化がことわざという形をもって各世代に受け継がれ、それぞれの国の基調な文化遺産として残されているのである。」と述べている。
従って、ことわざに使われている人称代名詞は定の人物を指すというより、その文化内の不定の人間を指示する総称に近い働きを持つと思われる。しかしことわざに使われる"he"の複数形である "they"は "he"に比べて数が少なく、また関係節を伴うように見受けられる。この数の違いから、英語におけることわざが示す総称性質はある一人の人を取り上げて、その人がこういう特徴を持っているという記述からどの人を取り上げてもこういう特徴を持っているというものではないかと思われる（久野・高見 2004:24-25)。
(6) They that marry in green, their sorrow is soon seen. 奥津(2000:141)

役職名等の役割名の二種類が使われるようである。下記は話し手が自身の固有名詞で自分を指示している例である。

(28) Nixon 大統領の発話：　You won't have Richard Nixson to kick around any more.

Schegloff (1996:443)　下線は筆者による

(29) Rebecca と Arthur が電話で娯楽産業におけるキャリアについて話しており、Arthur の発話：
What're we gonna do about Arthur. What're we gonna do with him.

Schegloff (1996:443-444)　下線は筆者による

このような固有名詞の使用について、Downing (1996:135)は、指示対象についての相互の知識を示し、話し手の権威の表れであり、意見の相違が見られる場面に使われると述べている。

> In all of these contexts, bare proper names are distinguished by the fact that they are "co-recognitionals", their use implicating that both the speaker and the addressee are assessed to have some degree of knowledge about the referent denoted. This property of these forms makes them especially useful in contexts where the speaker wishes to display his/her authority to speak about a particular referent, as is common in disagreement contexts.　Downing (1996:136)

相手との意見の相違が見られる場面で自身の権威を示すというこの効果は、(7)の名探偵ポワロの発話「エルキュール・ポワロは失敗をしないのです。」によく表れているだろう。

(7)　(探偵 Poirot から Joseph 卿) Hercule Poirot said: "There is no question of failure. Hercule Poirot does not fail."　Agatha Christie. *The Nemean Lion.* p.20 下線は筆者による

次の例では話し手が親族語で自分を指示している。

(30) 子供が両親の寝室に朝来て父親に：　Can we have breakfast?
それに対して父親の発話：　Leave Daddy alone, he wants to sleep.

Schegloff (1996:443)　下線は筆者による

(31) セラピストと息子とその母の会話で、母の発話：Mom made a trade with the school if they would.　Schegloff (1996:444)　下線は筆者による

親族名について、Levinson (1983:72)は、(32)を挙げて多くの言語で子供の前では母親が父親を呼ぶ場合に子供の視点を取ることがあると述べている。 (33)は愛犬 Shan-Shan に向かって自身を "mother"と指示している例であり、愛犬の視点を取っているということになる。

(32) Can Billie have an ice-cream, Daddy?　Levinson (1983:72)　下線は筆者による

(33) (Lady Hoggin から彼女のペット犬へ) "Shan-Shan, come here. Come here to mother, lovey – Pick him up, Miss Carnaby." Agatha Christie. *The Nemean Lion*.p.11 下線は筆者による

これらの三人称単数名詞用法について Schegloff (1996:447)は、指示する人の持つ公的性質そしてその公的性質が会話において関連性を持っていることを表に出さず伝えていると述べている。

> It bears notice that when speakers use a "third person reference form" to refer to self or addressed recipient (in place of "I" or "you"), they select such terms as display (or constitute) the current relevance with which the referent figures in the talk – whether it is "the President", "the doctor", "daddy", "mom" the personal name of one being referred to *as a public figure* ("Richard Nixon", "Bo Jackson", etc.) and the like. That these terms can serve to display the relevance which the referent has to the ongoing talk points up a significant but otherwise hidden feature of "I" and "you", namely that they mask the relevance of the referent and the reference at the point in the talk. Schegloff (1996:447)

さらに、Marmaridou (2000:110)は、三人称が話し手または聞き手を指示する場合には両者の間のある種の社会的距離、権力、権威を示すものであるが、それだけではないと述べている[10]。下記のような連帯・愛情等の心的態度表現が可能なことから、三人称の使用は社会的関係を構築・維持・強化そして変更する機能もあると述べている。

(34) 話し手と聞き手の solidarity and endearment: Stop crying and tell your mother all about it.
Marmaridous (2000:72)下線は筆者による

このように三人称単数表現は話し手と聞き手との間の多様な対人機能表現となっているが、それを発する話し手は自身をどのように見ているのだろうか。Bennett (2014:34)は話し手が自己を三人称で指示することによってより客体的な位置づけを示していると述べている。この客体的な位置づけとは Langacker (1985:127)が「自身をあたかも他の個人であるかのように特徴づけている」と述べていることと重なる。つまり話し手は舞台上の登場人物であり、客体の対象で

---

10 鈴木(1996:143)は現代日本語において話者が相手に対して自分のことを「ひと」と称することができることについて「話者が相手に対して、自分の権利や尊厳が侵害されたことに対する不満、焦燥、怒り、古碑といった心理的対立の状態にある場合に限られる」と述べている。この結論は、「ひと」が使われるのが(1)、(2)のような話者が相手のことばや態度に不快の念や反撥、あるいは怒りを感じ、相手を咎め避難する調子で言われており、逆に相手の言動が話し手にとって、嬉しい、楽しい、有難いなどの肯定的な心情で受け止められる場合、または話者が相手に何かを頼むという弱い立場に立つとき(3)には「ひと」が使えないという観察に基づいている。

(1) こいつ、よくもひとのことをぶったな。 鈴木(1996:132)
(2) あなた、よくもひとを騙したわね！ 鈴木(1996:132)
(3) （何かを自分がしたいときに）課長、それは是非ひとにやらしてください。 鈴木(1996:132)

この「人」について籾山(2014:24)は(4)は本人を除いた全ての人間、(5)は「おれ」を指示しており、これらは聞き手の視点を経由して自分を見ていると述べている。

(4) 人に頼ってはいけない。 籾山(2014:24)
(5) 人が親切に教えてやっているのにその態度はなんだ。 籾山(2014:24)

ある。しかしそれのみならず、その登場人物を観察し特徴化している存在でもあるということになる。話し手の客体的存在と主体的存在の分化が起こっており、その分化によって話し手は疑似的な「他者」になっているのである。

次の例では話し手が聞き手を二人称 “you”ではなく固有名または役割名で指示している。

(35) 話し手の authority: Johnny must go to bed now.　　Marmaridous (2000:72) 下線は筆者による

(36) Rebecca と Arthur が電話で娯楽産業におけるキャリアについて話しており、Rebecca の発話: Uuh – we're waiting for Arthur to make a decision.　　Schegloff (1996:446)　下線は筆者による

(37) 前大統領 Truman と現大統領 Johnson との間の会話　（トルーマンの誕生日に）　Truman 前大統領の発話： I will do that because I think I ought to report to the President. He might want me to do something.　　Schegloff (1996:445-446)　下線は筆者による

(38) 聞き手の authority : Would Lady Jane like some tea?　Marmaridou (2000:72)下線は筆者による

聞き手を三人称名詞で指示する話し手の心理について鈴木(1996:199-202)は次のように説明している。話し手が相手を二人称でとらえる場合は話し手と相手との間に一種の対立拮抗の状態、心理的な緊張が存在する。それに対して相手を三人称でとらえる場合には、話し手の心の中にはそのような緊張は存在せず、相手に対して対立の心的状態ではない。心理的には未だ本当の相手の資格を備えておらず、単なる対象と見ている。そして、話し手が対話の最中に相手を三人称に切り換える現象を「相手の客体化・非人格化・物体化」と呼び、話し手は相手を「自分と対等な資格を持つ言語的パートナーと見ることをやめ、相手を単なる物体として、まじまじと見つめ、観察し、コメントするからなのである。」(p.201)と述べている。この現象も、再び Langacker(1985:127)の言葉を借りると、「聞き手をあたかも他の個人であるかのように特徴づけている」ことになり、聞き手は聞き手ではなくなり疑似他者になっている。

従って、真の対話者を“I”と “you”で示すのが無標と考えられる英語においては、三人称単数名詞表現は互いを対話の相手として示すより[11]、互いを 疑似的な「他者」と見なす有標表現ということが考えられる。

この有標性は、次に述べる二つの点からも強められていると思われる。第一が Levinson (1983:75)が説明している「直示の優先性」であろう。 (39)の文が木曜日に発話される場合には「会おう」という「木曜日」は、次週（以降）の木曜日という解釈になる。そうでなければ

[11]今井(1995:160)は次のように述べている。「…これは古風なあるいは大仰な言いまわしが多少なりともユーモラスに響くからである。アメリカのスポーツクラブ会長夫妻と筆者夫妻が会食をしていた際、ウェイターが筆者の注文した飲物を間違って会長のところへ持ってきた。会長は筆者の方に目をやって No, no. Give it to His Majesty.（いや、それは陛下のだ）とウェイターに命じた。That gentleman（あちらのかた）と言うほど堅苦しい付き合いはないが、him では礼を失うるのでとっさに使ったわけだろう（「年上の婦人の面前でその人について she を使った叙述を行うのは失礼である」）ということがよく言われるが、実は男女・年齢差を問わず、発言の最初にでてくる場合、その場にいる人について人称代名詞を使うのはよくない。this guy（この男）程度でも he よりはましなのである)。ともかくこれをきかっけに会長と筆者は擬古文をまじえるのが習慣となった。下線は筆者による

話し手は“today”という直示表現を使うはずである。同じように“Do it now”の代わりに“Do it at 10.36”というのはおかしい[12]。従って、直示である人称代名詞が固有名詞等より優先されるのが無標ということになる。

(39) I'll see you on Thursday. Levinson (1983:75)

さらに、表現において文法的方策と迂言的方策がある場合、より簡潔な文法的方策が好まれるのではないだろうか。それが英語の人指示方策にも当てはまり、文法的方策である人称代名詞が名詞表現より優先されるとも考えられる。

第二が、グラウンディング機能の違いである。Langacker (2007:176)は、固有名詞は関連するコミュニティにおける名前が果たす役割に関する理想認知モデルに織り込まれているものであり、そしてその関連コミュニティにおいてその名前のみで“the unique intended referent”を選び出すことができることを固有名詞は表していると述べている。つまり、固有名詞や役割名は定表現ではあるものの、関連コミュニティにおける理想認知モデルがグラウンディングにおいて大きな働きをしている。その特徴が固有名詞/役割名の有標性を高めていると思われる。別の面から捉えると、固有名詞/役割名が参照点であり、ターゲットが指示対象とする場合、その結びつきを可能にしているのは関連コミュニティにおける理想認知モデルというドミニオンということになる。通常、ドミニオン自体は焦点化されるものではないが、この場合はそれに際立ちが与えられていることから有標性が高まると考えられる。

3.3 We・you・they

本節では、典型的には複数人称代名詞とみなされている“we”, “you”, “they”の多様な用法と具体例を確認し、その後で考察を行う。

Quirk, etc. (1985:350-351)は、“special use of *we*”と呼んでいる用法を、次の５つ((a)〜(e))に分け、そして付記として (f)-(g)を挙げている。

(a) inclusive authorial *we*:

- As *we* saw in Chapter 3,...

ここで使われる“we”には読み手を巻き込む働きがある。この巻き込む“intimate”な働きをもたない“you”が使われると、学究的な文章の場合にはインフォーマルな度合いまた権柄さが強すぎることになる。また、“let's”は“we”よりインフォーマルである。

(b) editorial *we*

- As *we* showed a moment ago,...

一人の筆者が書く形式的な文章において自己中心的な雰囲気がある“I”の使用を避けたい

[12]例外は二人称の代わりにタイトルで呼ぶ場合である。また、ロンドンにいる人が“here”の代わりに“London”ということができる場合もあると述べている。

ときに使われる。

(c) rhetorical *we*

- In the 19th century *we* neglected *our* poor as *we* amassed wealth.

"Nation"または "party"のような集団的意味において使われる。

(d) *we* in reference to the hearer (=you)

- How are *we* feeling today?

聞き手と同じ目線に立っていること、聞き手の当該の問題を共有しているという含意がある。

(e) *We* may occasionally be used in reference to a 3rd person (=he, she)

- *We're* in a bad mood today.

第三者、上記の例文の場合は上司を指している。

(f) Royal *we* : 伝統的に君主が自分を指す用法

(g) Nonstandard use, plural *us* is commonly used for the singular *me*

- Lend *us* a fiver.

非標準情報で単数の "me"の意味で使われる。「5ドルを自分に貸してくれ」

これらの用法を具体例に照らして見ていく。まず、(a)の "inclusive authorial *we*"そして(b)の "editorial *we*"は書物または新聞によく見受けられる用法であり、(40)がその例に相当する。(40)は文法書の冒頭部分であり、著者は Yule 一名であるにも関わらず "we"が使われている。西村義樹氏(pc)は、(40①)は、「定義を行う」ことから Yule 一名を指す "we"、そして(40②)は「見ていく」ことから Yule のみならず読者をも含む "we"ではないかと指摘している。とすると (40①)は (b) "editorial *we*"、(40②)が(a) "inclusive authorial *we*"の例ということになる。

(40) 1 Introduction　Overview

After briefly reviewing some basic grammatical terminology, such as NOUN, NOUN Phrase and PRONOUN, ①<u>we</u> try to define the nature of UNGRAMMATICAL English and contrast PRESCRIPTIVE with DESCRIPTIVE view of the language, ②<u>we</u> then look at some basic meaning distinctions, ...

George Yule (1998) *Explaining English Grammar.* p.1 下線・番号付加は筆者による

(c)の "rhetorical *we*"は(41)の "We"がその例で、(41)の "We"は警察全体という組織を表している。

(41) (Japp 警部から探偵 Poirot へ) Japp chuckled. He said: "<u>We</u> have our spies! Simptson's got you on to this Rubens business. Doesn't trust <u>us</u>, it seems!....."

Agatha Christie. *The Girdle of Hyppolita*.p.31.下線は筆者による

(d)の "*we* in reference to the hearer (=you)"は、医師や看護師から患者へ等、対話者間の一種の保護関係が使用には必要と言われている。(3)はその一例で、看護師ホプキンズから年老いた患者ジェラルドへの発話の中で "we"が使われており、 "we"はジェラルドを指示している。

(3) Mary protested, teas springing to her eyes:
"It isn't true, Dad. You've no right to say that!"
Nurse Hopkins intervened with a heavy, determinedly humorous air.
"Just a bit under the weather, aren't we, this morning? You don't really mean what you say, Gerrard. Mary's a good girl and a good daughter to you."

Agatha Christie. *Sad Cypress*. p.22. 下線は筆者による

(e)の第三者を指示する用法は非常に興味深い。これには(c)そして(d)の用法が関与しているのではないかと推測するが、残念ながら(e)の実際の用例を見つけることができなかった。

次に取り上げる"you"は "we"以上に多彩な用法を示している。まず、 "you"が話し手自身を指示している場合である。(42)の会話は車に乗っているナンシー、ヴィヴィアン、シェーンそしてマイクの4名が登場し、運転者であるマイクが間違って一方通行に入ってしまい、それについての発話である。"Y'see all these cars coming."を発話しているナンシー自身も沢山の車が来るのを見ている。このナンシーの "Y'see = You see"の用法を Schegloff (1996:442)は "personal (and knowledgeable) 'I'"と呼んでいる。

(42) Nancy: It's scary feeling. Schegloff (1996:442)筆者により原文を簡便に表記している
Vivian: Yeah
Shane: Yeah. It certainly is.
Nancy: Y'see all these cars coming. 下線は筆者による

(42)の用法では "you"はナンシーそして他の同乗者という限定された指示だが、次の(43)の"you"が指示しているのは、日本語訳「自分」が示すようにおそらく話し手を含む「誰もが」(everyone)である。

(43) 映画『明日、君がいない』 "2:37"：(いじめっ子のルークにも悩みがある。) "Sometimes you get so wrapped up in your own problems that you just don't notice anybody else."
ルーク：「時にはなんていうか、自分の問題だけで頭がいっぱいになって他人の存在に気づかなくなるんだ。」ゲーリー・スコット・ファイン訳 下線は筆者による

上記の映画の例で "I"を使うと、その事柄は話し手のみの問題となり、"you"を使うことにより「誰でもそうだろう、君もだろう」という相手からの共感を求める表現となっている。真野(2010:179)は(44)の例を挙げ「自分自身しか知らない経験を話しながら主語を you とすることで、相手を自分の立場に立たせ、相手を引き込んでいく」と述べている。(45)は "don't we"の再帰代名詞から "you"が自分をも含む「私たちそして皆」であり、「クリスマス後には私たちもそして皆も太るのよね」と相手を引き込んでいることがよくわかる。

(44) It wasn't a bad life. You got up at seven, had breakfast, went for a walk….　　真野(2010:179)

(45) Ann: You do put on after Christmas, don't we.　　Lerner (1996:282)

いずれも下線は筆者による

(43～45)の "you"は自己の経験を聞き手の視点で提示し、特定の聞き手に焦点を当てた「みんな」を "you"は意味していると解釈できるだろう。従って、(43～45)ではまだ聞き手を指示するという本来の "you"の直示性がかなり維持されていると考えられる。

それに対して、Marmaridous (2000:77)が挙げている(46)は、不特定だが限定された聞き手に焦点をあてた「みんな」の例である。Marmaridous(2000:77)はこの用法を"quasi-generic addressee"の"you"（準総称用法の you）と呼び、総称用法と区別している。この "you"は特定の聞き手(deictic)ではないが、この料理をしようとしてレシピーを読んだ人を指しており、単に "people"で置き換えると意味が異なってしまうと説明している。

(46) 調理法の紹介：You beat the eggs until fluffy.　　Marmaridous (2000:77) 下線は筆者による

そして不特定で限定されていない「みんな」を意味している "you"が(47)と (48)ではないだろうか。ピーターセン(1990:71)は (47)の"you"は「自分の経験から一般論を推定する場合」と説明している。同じく、 (48)は話し手であるジョセフ卿が女性についての自分の意見を聞き手のみならず一般論へと広げようとしている "you"と言えるだろう。(47)も(48)も聞き手の視線を表しているが、ここでの "you"の直示性は非常に薄いと言えるだろう。

(47) You can search the world over and never find a beer to match Kirin Lager for the richness of its flavor.（世界中探してみても、キリンラガーに並ぶ風味豊かなビールはみあたらない。）

ピーターセン(1990:71)下線は筆者による

(48) (Joseph 卿が居間にいる複数の聞き手に向かって) "Then, of course, Milly confessed what she'd done and I lost my temper a bit. However, I calmed down after a while – after all, the thing was done and you can't expect a woman to behave with any sense – and I dare say I should have let the whole thing go if it hadn't been for meeting old Samuelson at the Club."

Agatha Christie. *The Nemean Lion*.p.10. 下線は筆者による

さらに、聞き手の姿が容易に思い浮かばない場合に使われる "you"もある。そのような場合について、Langacker (2011)は単数の非人称 you は "virtual dialog"という精巧なメンタル構築物に関与していると思われ、そこでは話し手は創造上の対話者と対峙していると説明している。特別なケースの場合は、その話し手は彼自身であると述べている。

(49) a. You should ever underestimate yourself. Langacker (2011:196)下線は筆者による
b. You can never be too rich or too thin. ibid.
c. You work hard for years and you get rewarded by being fired. ibid.

話し手自身と対峙している例が下記の(50)ではないかと思われる。 (50)は小説の地の文であるが、姉ローズマリーについての主人公アイリスの心の中の葛藤が"you"を使って描写されている。「誰だって自分の家族のことなどちゃんと考えたことなどあるわけがない」と自分の経験を客観化させたいという気持ちが "you"の使用に現れている。

(50) With a shock Iris realized suddenly that it was the first time in her life she had ever thought about Rosemary. Thought about her, that is objectively, as a *person*. She had always accepted Rosemary without thinking about her. You didn't think about your mother or your father or your sister or your aunt. They just existed, unquestioned, in those relationship. You didn't think about them as people. You didn't ask yourself, every what they were *like*.

Agatha Christie. *Sparkling Cyanide*. p.6. 下線は筆者による

一方、同じ "you"が非常に軽い意味を持っている場合もある。巻下(1997:32-33)は「話者の側での『どんな人にとっても』の気持ちを土台にして、『それこそ』とか『まったく持って』ぐらいの気持ちを表明し、加えて相手からの共感を期待する態度を表明する表現」と説明している。

(51) What do you think about that? That's men for you. 巻下(1997:33)下線は筆者による

同じくピーターセン(1990:139)も「気持ちとしては indeed に近い強調の気持ちがこめられている使い方」として次の例を挙げている。

(52) （期待の四番打者が９回裏にスタンド上段に入る特大のホームランを打ったとき、アナウンサーが） Now, that's a homerun for you! （やりました、これぞというホームランです！）

ピーターセン(1990:139)下線は筆者による

いわゆる慣用表現となっている “you see”/ “you know”も「軽い意味の you」に含めることができるのではないだだろうか。(53)で “you see”と言った Mr. Jones の次の発話の内容 「夕食のときだったのです。私は少女の隣に座っていました」は聞き手である Tommy にはそれまで知らない事柄であり、(54)の “you know”の場合も同じである。字義通りの「あなたはわかる・あなたは知っている」という意味は非常に希薄となっており、相手からの共感を期待する表現である。

(53) “Well,” said Tommy, retiring gracefully from the position, “take your own time and let us have it in our own words.”
There was a pause.
“<u>You</u> see,” said Mr. Jones at last, “it was at dinner. I sat next to a girl.”
Agatha Christie. *The Unbreakable Alibi*.p.146.下線は筆者による

(54) “I say, <u>you</u> know, I am no end grateful,” said Mr. Jones, rising to his feet and shaking Tommy by the hand.　Agatha Christie. *The Unbreakable Alibi*.p.149 下線は筆者による

最後に“they”についてであるが、 “they”の話し手または聞き手を指示する用法については残念ながら先行研究をほとんど見つけることができなかった。その中で、Langacker (2007:180)は、“they”は人類が持っている collective knowledge や wisdom を表している表現に使われると指摘している。話し手も聞き手も人類であることから “they”の中に含まれていることになる。

(55) <u>They</u> say you can't be too thin or too rich.　Langacker (2007:180)下線は筆者による

類似の用法が下記 (56)の “Don't <u>they</u> say ‘to-morrow never comes?”の “they”にも見られ、 “they”が表す総称に話し手アンソニーも含まれていると解釈できる。アンソニーは「明日はかならず来るから」と恋人のアイリスに伝えたく、それを客観的に表すために “they”を使っている。ここでは “they”は総称表現となっている。元来、話し手・聞き手を含まない三人称代名詞であるが、「含まない」という共通点が逆に話し手と聞き手を結び付け、両者を同一視座に立たせることになるのかもしれない。これは日本語の直示「あ」の用法を想起させる。

(56) (Anthony) “You were saying something What's the matter, darling? I can hear you sighing through the telephone. Is anything the matter?”
(Iris) “No – nothing. I shall be all right to-morrow. Everything will be all right to-morrow.”
(Anthony) “What touching faith. Don't <u>they</u> say ‘to-morrow never comes’?”
(Iris) “Don't.”
(Anthony) “Iris – something *is* the matter?”

(Iris) "No, nothing I can't tell you. I promised, you see."

Agatha Christie. *Sparkling Cyanide*. pp.79-80 下線・話者名の付記は筆者による

一方、総称表現の"they"はなんらかの非難めいた口調、市民生活に影響を及ぼす不可解な権力を意味していることがあるとQuirk, etc. (1985:354)は下記の例文を挙げて述べている。

(57) I see they're raising the bus fares again. Whatever will they be doing next? Quirk, etc. (1985:354)
(58) The members took up a them and us attitude to the Union. Quirk, etc. (1985:354)

下線は筆者による

以上、概観してきたように "we, you, they"は非常に豊かな指示幅[13]を持っている。話し手を「含む」が典型的な意味である "we"は、「含まない」第三者 "*We* may occasionally be used in reference to a 3rd person (=he, she)"表現まで持っている。そして話し手を「含まない」のが典型的な意味である "they"ですらも、その総称用法を用いることにより話し手の見方を示すことができる。そして "you"の意味拡張は驚くほどである。特定の聞き手の指示から話し手自身のみならず世間一般表現、そして共感・強調表現までの広がりを見せている。

なぜ、複数人称代名詞はこのような豊かな指示幅を持ち得るのだろうか。Langacker (2011:192-196)は特定の指示物を選び出す機能を持つ人称代名詞がなぜ非人称用法としても用いることができるのかについて "delimitation"、指しているモノのサイズ・外延の範囲から説明している。 "here"や "now"の指示範囲が様々であるのと同じように、人称代名詞も、注意の範囲をどのように限定するかで適応される幅が異なってくると述べている。

英語人称代名詞が持つ"delimitation"の広さは人称代名詞が固有名詞とは対極に持っているスキーマ性という特徴が寄与していると考える。Langacker (2007:176)/Langacker(1996:341-342)は、固有名詞は関連するスピーチコミュニティにおいてその名前のみで特定の意図する指示物を抜き出すことが可能であるが、人称代名詞はその対極にあると述べている。所与の人称代名詞が指示可能な対象は限られておらず、人称代名詞はスキーマ的タイプ特定を行うのみである。例えば、 "she"は単数・有生・女性のみを指示しているにとどまっている。このスキーマ性の高さは日本語の人称代名詞と比較すると顕著に見えてくる[14]。そしてそれに加えて「複数」人称

---

[13] Quirk, etc. (1985:353-354)は、全ての複数形人称代名詞 - we, you, they-が表す "people in general" は、それぞれの単数形に関連する特別な意味を表し、完全に置き換え可能ではないと述べ下記の例文を示している。
(1) We live in an age of immense changes. Quirk, etc. (1985:353)
(2) You can never tell what will happen. Quirk, etc. (1985:353)
(3) They say it's going to snow today. Quirk, etc. (1985:354)

[14]英語人称代名詞の持つスキーマ性の高さは日本語のそれと対照すると顕著に見えてくる。Siewierska (2004:9)は複数言語の人称代名詞を、①closed class membership、②lack of morphological constancy、③lack of specific semantic content、④lack of stylistic and sociolinguistic implicative properties、⑤expression of grammatical person、⑥inability to take modifies、⑦restrictions on reference interpretation の点から分類し、 "The pronominality scale" を提案している。それによると、 "+Nominal" の性質が強いのがタイ語と日本語の人称代名詞、そして "+Pronominal" の性質が強いのが英語とポーランド語の人称代名詞である。

代名詞はその複数の数を特定していない不特定性を持っており、その不特定性が豊かな指示幅に寄与していると思われる。

すでに述べたように、特に豊かな意味の幅が見られるのは「特定の聞き手を指す」が典型的な意味である“you”である。そして拡張用法における“you”には具体的な行動記述が目的というより、記述内容についての話し手の観察結果そして意見が主張されている。例えば、(47)は「キリンラガーに並ぶ風味豊かなビールが見つからない」という単なる行動の記述ではなく、そこからの話し手の観察結果である「あなたはキリンラガーをおいしいと思うはずだ」という主張がこの文の主旨であろう。なぜ観察の提示、意見の主張という機能が可能になるのだろうか。

(47) You can search the world over and never find a beer to match Kirin Lager for the richness of its flavor.（世界中探してみても、キリンラガーに並ぶ風味豊かなビールはみあたらない。）

ピーターセン(1990:71)下線は筆者による

(47)の場合、一人称が用いられていないことから行為者としての話し手の姿は舞台上から完全に消えており、話し手は自分ではない“you”が関与している事柄を見ている観客、つまり観察をする存在でしかない。この観察者という位置づけが“you”の拡張表現の特徴である観察の提示・意見の主張と呼応していると思われる。

前節で取り上げた三人称単数表現においても、それらが登場人物を観察し特徴化している、つまり話し手は主体化している存在でもあるという同様の特徴が見られた。しかし、“you”の場合は、それに加えて聞き手からの共感を積極的に求めるという機能が見られる。三人称単数表現の場合は視点が「他者」であるが、“you”は「聞き手」が視点という違いである。例えば、(47)は話し手がビールについての自分の意見を述べているがビールについての意見を“you”の

例えば、英語の(1)の“his”は 定の“John”を指示しているが、日本語の(2)の「彼の」は必ずしも「ジョン」を指示してはいない。また(3)の“he”は不定“everyone”を指示しており、話し手も含まれるが、(4)の「彼」は話し手を含まない全くの第三者でもよいことになる。さらに、(5)のBは自分が知識を持たない“John Smith”について“he”で指示しているが、日本語(6)は指示する人が話し手にとり既知ではないと「彼」は使いにくい。さらに日本語(7)の「あなた」は形容詞で修飾できるが、英語は非常に限られた場合のみであり、多くの場合は非文である(8)。そして英語の場合、聞き手を固有名詞で指示するのも一般的ではないが(9)、日本語は可能である(10)。

(1) John$_i$ loves his$_i$ son.　神崎(1994:17)
(2) ジョンは彼の息子を愛している。
(3) Everyone$_i$ thinks he$_i$ has a right to be here.　神崎(1994:7)
(4) 誰もが彼はここにいる権利があると考えている。
(5) A: I saw John Smith yesterday.　B: Who is he?　神崎(1994:8)
(6) A:昨日ジョン・スミスに会ったよ。B1:*誰ですか、彼は？ B2:誰ですか、その人は？
(7) やさしいあなたが好き。
(8) *I like kind you.
(9) 聞き手に対して：a. #What does Hanako think about it? b. What do you think about it, Hanako?
(10) 聞き手に対して：花子はどう思うの？

このように英語人称代名詞は少なくとも日本語に比べて文法的性質が強い。そこにスキーマ性質の高さが見出せるのではないかと思う。

視点で提示しており、その視点を示すことにより共感表現となっている。同じ機能が "we"にも見られる。 そして "they"が表す「他者」対「話し手と聞き手」という組み合わせから "they"にも共感機能が生まれている。

これは Traugott(1995)による用語"subjectification" (the hypothesized tendency for meanings to become more subjective)に当てはまる意味拡張ではないかと思われる。Traugott(1995:47)は文法化においては、指示的・命題的意味からテキスト的な意味、そして感情表出的・対人的への意味変化への一方向仮説を提示し、主観性が増していく("subjectification") と主張している。この Traugott の感情表出・対人関係の立場から捉えた "subjectivity" (主観性) の概念と Langacker(2006:17)の "vantage point" (視点) から捉えた "subjectivity" (主体性) の概念の対立・違いが議論されることがある(Brisard 2006:41)。しかし、 "you"の意味拡張は「視点の違い(Langacker)」が「意味の感情表現拡張(Traugott)」と密接にかかわっていることを示しており、両者の "subjectivity"の交差を表していると考える。

3.4 主体性/客体性の二面性を持つ「話し手」

本節では3.1節〜3.3節の考察を踏まえて、様々な言語表現で示される話し手の主体性/客体性を考えていく。

3.1節での "this/that/it"の分析から、話し手が自身を "I"と呼ばず、そして相手のことも "you"と呼ばず、 "this/that/it"のいずれかを用いる状況というのは、双方を未だ対話者とは完全に認識していないことを示していると考えられる。つまり、話し手はまだ十分な客体性を持っていない状態である。一方、"I"と"you"は互いを対話者と認識していることを示すサインであり、この段階で話し手は舞台上の役者として活躍するに十分な客体性を持っていることになる。

3.2 節では話し手が自身を固有名詞や役割名で指示するという三人称単数表現を取り上げたが、このような表現は「自身をあたかも他の個人であるかのように特徴づけている」表現である。話し手は舞台上の登場人物、つまり客体の対象であるのみならず、その登場人物を観察し特徴化している存在でもあるということになる。話し手の分化が起こっており、その分化によって話し手はもはや話し手ではなくなり、「他者」の姿を装っている(ref. Langacker 1999)。

3.3節の複数人称代名詞、特に話し手が自身を "you"で指示する場合では、話し手の姿は舞台上から完全に消えている。話し手は自分ではない "you"が関与している事柄を見ている観客、つまり観察をする存在でしかなく、かつ、実際にはこの観察者は観客席ではなく舞台上にいるという特殊な状況である。この特殊な状況を可能にしているのは、話し手が持っている自分の心を出発点/参照点として他者の心を読むメカニズムではないだろうか (唐沢 2014)。他者の心の推論と他者との繋がりの関係について議論している唐沢(2004:31)は、他者の心の推論に際して自分の心を手掛かりにする「シミュレーション説」を紹介している。話し手が"you"等の人称表現を用いて自己を指示するというケースはこのシミュレーションを明示的に示しているもの

ではないかと思われる。

このように整理すると、話し手は自身をどのように捉えているか、そして聞き手にどのように自身を捉えてもらいたいとしているのかによって、自身を指示する表現を使い分けていることがわかる。そして、“I”以外の表現で指示される話し手とは、舞台上（必ずしも舞台の真ん中ではないが）で客体の対象として演技をしつつも観察者としての主体的存在の役割も果たすという二面性を明示的に示している存在であることがわかる。

それでは“I”とは何か。上述したように“I”と“you”は互いを対話者と認識していることを示すサインであり、この段階で話し手は舞台上の役者として活躍するに十分な客体性を持っていることを示してはいる。しかし、Langacker (2007:180-185) [15]が詳述しているように、話し手は事柄を解釈する認知主体でもあることから観察者としての主体的存在を完全にやめることはできない。つまり完全な客体的対象とはなり得ず、“I”は客体性の背後に主体性が潜むという二面性を持っている存在ということになる。

この点について廣瀬(2009:154-155) も次のように説明している。廣瀬(2009:154-155)は話者指示詞を、聞き手と対峙する伝達の主体としての「公的自己」と聞き手の存在を想定しない思考・意識の主体としての「私的自己」に分けている(ref. 廣瀬 1997)。

- 日本語には私的自己を表す固有のことばとして「自分」があるが、公的自己を表す固有のことばはないため、誰が誰に話しかけているかという発話の場面的な要因に左右される様々なことば（「ぼく・わたし」「お父さん」「先生」など）が代用される。
- 英語には公的自己を表す固有のことばとしてＩがあるが、私的自己を表す固有のことばはないため、当該私的表現が誰のものか、つまり、一人称のものか、二人称のものか、三人称のものかにより、本来的には公的な人称代名詞が私的自己を表すのに転用される。　廣瀬(2009:155)

---

[15] “I”と“you”の二面性について Langacker(2007:180-185)は次のように述べている。“I”そして“you”は特別なステータスを持っている。なぜならば、通常のスピーチシナリオにおいて、対話者たちは言語的表現の概念化者であり、従って、彼らは off stage におり、主体的な存在である(subjectively construed)である。一方、人々は自らそして互いのことについて話すことを好むことが多く、話し手そして聞き手は言語表現の客体(objective content)となり、それは“I”そして“you”でプロファイルされることがある。もし“I”そして“you”という指示物で明示されていないとしても、話し手と聞き手は単に概念化者の役割(conceptualizing role)のみを持つのではない。なぜならば、話し手と聞き手という関係そしてその相互行動は表現の意味を支える概念的基盤(conceptual substrate)であり、表現の意味を形づけ支える働きをしているからである。“I”そして“you”はこの二面性を持っており、それが“this ambivalence”を意味しており、主概念化者である“I”そして“you”は完全な客体性(maximal objectivity)を持つものではない。

典型的なスピーチイベントにおいては、対話者は話し手そして聞き手としての役割を交互に担う。従って、話し手は話し手としての役割を担っていると同時に潜在的な聞き手の役割も担うという二重の立場にあり、聞き手も同様に二重の立場を潜在的に持っている。Langacker (2007:182 図 6)ではこの二重性を“dual role as speaker and hearer”と呼び、input spaces そして blend で表現している。話し手は客体である聞き手に対しては主体的な立場にあるが、同じ話し手は次には聞き手により客体化されるという、ここでも二面性を示している。この二重性を Langacker (2007:183 図 7)は“dual role as subject and object of conception”と呼び、同じく input spaces そして blend で表している。

そして代名詞“you”は話し手が概念の主体であること、そして聞き手が概念の客体であることを表す。代名詞“I”は、話し手が概念の主体であることを表すと同時に、その発話によってその話し手は onstage の焦点化された客体であることも同時に表していると述べている。これは他者の“mind”の理解、そして他者の“vantage point”の理解の表れであり、話し手は聞き手の経験をシミュレーションしていること、“intersubjectivity”を示していると述べている。

廣瀬(2009)そして Langacker(2007)の考えは次に述べる "I"の特別な位置づけ、「非対称性」に説明を与えることができると思われる。3 節の分析は"I"は他の人称代名詞とは異なる特別な位置づけを持っていることを示している ー それは、 "I"は話し手しか指示しないが、話し手は他の人称代名詞、指示詞、三人称名詞表現の全てで自身を非常に豊かに表現できるという非対称[16]である。この非対称性の理由を次のように説明できるかもしれない。廣瀬(2009)そして Langacker(2007)に基づくと、発話された"I"は「主体性」と「客体性」の二重性を示す「分けられない個人」(平野 2012)ということになる。自己の主体性は他者とは共有するものではない。そこから、話し手の主体性をも意味する"I"を参照点とし、他者をターゲットとして表現することは不可能であり、 "I"で他者を指示することができないということになる。一方、話し手は自分の心を参照点として他者の心を読むことができ、そこから話し手は他の人称代名詞、指示詞、三人称名詞表現の全てで自身を非常に豊かに表現できることになる。

とするならば、"I"は客体的自己を前面に出しながらもその背面には主体的自己を持っていることを示す表現である。一方、 "I"以外の話し手指示表現はそれが逆転し、主体的自己が前面に出されそして客体的自己が背面に表されている表現なのではないだろうか。つまり焦点のシフトがそこに見られるのである。この提案にはさらなる考察が必要であり、今後継続すべき研究課題であるが、現段階ではこのように考えている。

4. 結論

本論では話し手を "I"そして聞き手を "you"以外で指示する英語表現を分析対象とし、その分析を通して話し手の姿を考察することを目的とした。2 節では分析に先立ち、その理論的枠組みと分析の鍵となる認知文法における「主体性/客体性」の概念について説明した。分析結果（3 節）は次の通りである。

3.1 節では話し手・聞き手を指示するのに "this/that/it"が使われる状況を考察した。直接顔を合わせていない電話においては直示である"this/that"が使われる。認知文法においては "this/that"は真の "grounding elements"と考えられており、 対話者が互いを"this/that"で指示している状況は互いがグラウンディング行為を行っている最中と解釈することができる。 さらに、ドア越しの状況や暗闇そして互いを対話者と認識できてない状況においては、直示でもなく"Grounding elements"でもない "it" （「尊敬の三人称 it」・「知っている期待値の高い声の it」）が用いられる。そこから、話し手が自身を "I"と呼ばず、そして相手のことも "you"と呼ばず、 "this/that/it"を用いる状況というのは、双方を未だ対話者とは認識していないことを示していることになり、逆に、 "I"そして "you"の使用は互いを対話者/客体的存在と十分に認識しているサインである

[16]この非対称性は日本語が自称詞を対称詞として用いる「反転」現象を持っていることと比較すると顕著である。日本語の場合、自称詞を他称詞として使用する「反転自称」がある。自分から近いことを伝えることにより、相手に対する親密または軽卑の感情を表す用法である。
(1) 僕はいくつ？
(2) わたしの名前は何？
(3) てめえ、やりやがったな。

と考えられることを述べた。

3.2 節では “he, she”そして固有名詞・親族名・役職名の単数三人称表現を考察した。話し手が自身をそして聞き手を “he”または “she”で指示する例は電話における会話やことわざを除くとなかった。一方、固有名詞・親族名・役職名は対話者間の社会的関係の構築のために効果的に使われている。これらの使用は指示対象についての公的性質の知識、そして話し手の権威・愛情を示す働きがあり、これらの三人称単数名詞表現使用は「自身をあたかも他の個人であるかのように特徴づけている」用法である。話し手は舞台上の登場人物、つまり客体の対象であるのみならず、その登場人物を観察し特徴化している存在でもある。話し手の分化が起こっており、その分化によって話し手はもはや話し手ではなくなり、「他者」を装っている存在である。

3.3 節では “we, you, they”を取り上げた。「話し手を含む」が典型的な意味である “we”は、話し手を含まない表現まで持っている。そして「話し手を含まない」が典型的な意味である “they”ですらも、総称用法を用いることにより話し手の見方を示すことができる。そして、特に豊かな用法を見せているのは “you”であり、具体的な聞き手の指示から強調表現までの広がりを確認した。この拡張表現の “you”が用いられている文において、話し手の姿は舞台上から完全に消えており、話し手は自分ではない例えば “you”が関与している事柄を見ている観客、つまり観察をする存在でしかないことを表している。そしてこの観察者は実際には観客席ではなく舞台上にいるという特殊な状況である。そして聞き手の視点から事柄を提示することにより共感表現へと拡張している。

複数人称代名詞の豊かな指示幅は人称代名詞が持つスキーマ的タイプ特定性と複数性が寄与しているのではないかとする見方を示した。そして特に豊かな拡張を示している “you”については Traugott(1995)による意味変化と方向性が一致していること、そこから“you”の意味拡張は「視点の違い(Langacker)」が「意味の感情表出拡張(Traugott)」と密接にかかわっている例の一つであり、Langacker と Trougott の “subjectivity”が交差していることを表しているとの意見を述べた。

3.4 節では上述の分析結果を踏まえて、話し手の持つ主体性/客体性の二面性と話し手指示表現について考察した。3 節の分析は、“I”は話し手しか指示しないが、話し手は他の人称代名詞、指示詞、三人称名詞表現の全てで自身を非常に豊かに表現できるという非対称を示している。“I”は話し手が自身を話し手であると認識している表れであり、かつ舞台上の役者であることを表す十分な客体性を示す表現である。しかし話し手は事柄を認識する存在でもあり、主体性を完全には失うことはできない存在でもある。 従って、“I”は客体性を前面にそして主体性を背面に持つ表現ということになる。自己の主体性は他者とは共有するものではない。そこから、話し手の主体性をも意味する“I”を参照点として他者をターゲットとして表現することは不可能であり、 “I”で他者を指示することができないというということになる。一方、 “I”以外の話し手指示表現は、話し手が舞台上で対象として演技をしつつも観察者としての役割も果たしてい

ることを表す表現である。そこから “I”とは逆に主体性を前面にそして客体性を背面に示す表現であると考えられる。自分の心を参照点として他者の心を読むというメカニズムがそこにはある。従って、 “I”とそれ以外の表現には「客体性」と「主体性」の焦点のシフトが見られるという意見を述べた。

参考文献

Bennett, Phil (2014) “Langacker’s Cognitive Grammar.” *The Bloomsbury Companion to Cognitive Linguistics*. London/New York: Bloomsbury Academic. pp.29-48.

Brisard, Frank (2006) “Logic, subjectivity, and the semantics/pragmatics distinction.” In Angeliki Athanasiadon, Costas Canakis & Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. pp.41-74.

Downing, Pamela A. (1996) “Proper Names as a Referential Option in English Conversation.” In In Barbara Fox (ed.) *Studies in Anaphora*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.95-143.

Fillmore, Charles J. (1977) *Lectures on Deixis*. CSLI Publications.

Gundel, Jeanette, K. Nancy Hedberg & Ron Zacharski (1993) “Cocnitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse.” *Language* Volume 69, Number 2. pp. 274-307.

平野 啓一郎 (2012) 『私とは何か――「個人」から「分人」へ』東京：講談社現代新書.

廣瀬幸生(1997)「人を表すことばと照応」中右実(編)『指示と照応と否定』東京:研究社. pp.1-89.

廣瀬幸生(2009)「話者指示性と視点と対比—日英語再帰代名詞の意味拡張の仕組み—」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明（編）『「内」と「外」の言語学』東京：開拓社.pp.147-173.

今井邦彦 (1995)『英語の使い方』東京：大修館書店.

唐沢かおり (2014) 「心はいかに自己と他者をつなぐのか」唐沢かおり・林徹（編）『人文知』東京：東京大学出版会.pp.27-49.

神崎高明 (1994)『日英語代名詞の研究』東京：研究社.

久野暲・高見健一 (2004)『謎解きの英文法　冠詞と名詞』東京:くろしお書店.

小泉保 (1990)『言外の言語学—日本語語用論』東京：三省堂.

Langacker, Ronald W. (1985) “Observations and Speculations on Subjectivity.” In John Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax: Proceedings of a Symposium in Iconicity in Syntax, Stanford, June 24-6, 1983.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.109-150.

Langacker, Ronald W. (1990) “Subjectification.” *Cognitive Linguistics* 1-1. pp.5-38.

Langacker, Ronald W. (1996) “Conceptual Grouping and Pronominal Anaphora.” In Barbara Fox (ed.) *Studies in Anaphora*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.333-378.

Langacker, Ronald W. (1999) “Virtual Reality.” *Studies in the Linguistic Sciences*. Volume 29. pp.77-103.

Langacker, Ronald W. (2002) “Deixis and subjectivity.” In Frank Brisard (ed.) *Grounding: the epistemic*

footing of deixis and reference. Berlin: Mouton de Gruyter. pp.1-22.

Langacker, Ronald W. (2006) "Subjectification, grammaticization, and conceptual archetypes." In Angeliki Athanasiadon, Costas Canakis & Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. pp.17-40.

Langacker, Ronald W. (2007) "Constructing the meaning of personal pronouns." In Günter Radden, Klaus-Michael Kőpcke, Thomas Berg and Peter Siemund (eds.) *Aspects of Meaning Construction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.171-187.

Langacker, Ronald W. (2011) "On the subject of impersonals." In: Brdar, Mario, Stefan Th. Gries and Milena Žic Fuchs (eds.) *Cognitive Linguistics Convergence and Expansion*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.179-217.

Lerner, Gene H. (1996) "On the place of linguistic resources in the organization of talk-in-interaction: 'second person' reference in multi-party conversation." *Pragmatics* 6:3. pp.281-294.

Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

真野泰 (2010)『英語のしくみと訳しかた』東京：研究社.

巻下吉夫 (1977) 「英語表現と訳語」中右実（編）『文化と発想とレトリック』東京：研究社.pp.2-38.

Marmaridou, Sophia S.A. (2000) *Pragmatic Meaning and Cognition*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

籾山洋介 (2014)『日本語研究のための認知言語学』東京：研究社.

奥津文夫 (2000)　『日英ことわざ比較文化』東京：大修館書店.

ピーターセン、マーク (1990) 『続　日本人の英語』東京：岩波書店.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Schegloff, Emanuel A. (1996) "Some Practices for Referring to Persons in Talk-in Interaction: A partial Sketch of a Systematics." In Barbara Fox (ed.) *Studies in Anaphora*. Amsterdam/Philadelphia. John Benjamins Publishing Company. pp.437-485.

Siewierska, Anna (2004) *Person*. Cambridge: Cambridge University Press.

鈴木孝夫 (1996)『教養としての言語学』東京：岩波新書.

Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus*. Oxford/New York: Oxford University Press.

Thomas, Jenny (1995) *Meaning in Interaction*. London/New York: Longman.

Traugott, Elizabeth Closs (1995) "Subjectification in grammaticalisation." In Dieter Stein and Susan Wright (eds.) *Subjectivity and subjectivisation*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.31-54.

Uehara, Satoshi (2006) "Toward a typology of linguistic subjectivity: A cognitive and cross-linguistic approach to grammaticalized deixis." In Angeliki Athanasiadou and Costas Canakis and Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

pp.75-117.

例文出典

Agatha Christie

Sad Cypress (1986) London: Collins.

The Nemean Lion, Thirteen for Luck! (1987) London: Collins.

Where There's a Will, Thirteen for Luck! (1987) London: Collins.

The Mystery of the Spanish Shawl, Thirteen for Luck! (1987) London: Collins.

The Girdle of Hyppolita, Thirteen for Luck! (1987) London: Collins.

The Unbreakable Alibi, Thirteen for Luck! (1987) London: Collins.

Sparkling Cyanide (1987) London: Collins.

George Yule (1998) *Explaining English Grammar*. London: Oxford University Press.

映画『明日、君がいない』"2:37":ゲーリー・スコット・ファイン「be english」『朝日 be on Sunday』2007年4月28日.

"Subjectivity" and "Objectivity" in the English Expressions of a Speaker and a Listener

Kumiko Yumoto

yumoto@luce.aoyama.ac.jp

Keywords: expressions of a speaker, expressions of a listener, subjectivity, objectivity, meaning extension

Abstract

English has many expressions referring to a speaker/listener. Not only "I" but also "you", "they", "we", proper nouns and various other words can represent a speaker and the same applies to a listener. This paper analyzes these expressions from the viewpoint of "subjectivity" and "objectivity" in the framework of Cognitive Grammar. A speaker fills two roles at one and the same time – a subjective role to observe the event and an objective role to act in the event. We will show that the pronoun, "I", focuses on a speaker's objective role with subjectivity in the background and "other expressions" place a speaker's subjective role in the foreground with objectivity in the background.

（ゆもと・くみこ　青山学院女子短期大学）